

中古・中世における「たよりなし」「びんなし」「ふびんなり」

田 中 雅 和

目次

はじめに

「たより」・「たよりなし」について

「びんなし」について

漢字表記の「便」「無便」「便無し」について

「びんなし」と「ふびんなり」について

むすびにかえて

はじめに

「びんなし」と「ふびんなり」とは、類似した意味を表す語として扱われる。⁽¹⁾「ふびんなり」については、中世になつてゝ氣の毒だ・かわいそうだの⁽²⁾の意味にも用いられるようになることを論じたものがあり、就中松尾聰氏は中古・中世の用例についての詳細な考察と解釈の作業を通して、転義⁽³⁾「氣の毒・かわいそう」に転じたのは鎌倉時代に入つてからのこととされ、それ以前の用例は原義で解釈すべきであるとされた。また、類義関係にある「びんなし」と「ふびんなり」との関係についても、平安和文作品の例を中心に、その意味の相違点が論じられたものがある。⁽³⁾

「びんなし」「ふびんなり」は、それぞれ漢語「無便」「不便」から発した語と思われ、共に字音読の要素「便」を含む。『類聚名義抄』に「便」の訓として「タヨリ（ナリ）」（佛上三〇）が、「無」にナシ、「不」にアラズの訓があり、また、『色葉字類抄』に「便タヨリ宜使倚風」が登載されることを考え合わせると、訓読の可能性として、「たよりなし」「たよりにあらず・たよりならず」が想定される。（古辞書類に「無便」はなく、「不便フヒン」（黒川本色葉字類抄・中巻・疊字）が確認できる。）従って、これら四者が如何なる関係にあるかを考察することは、本邦における漢語受容の実態を考える上でも、意義のあることと考える。しかし、実際には「ふびんなり」と対照されるべき「たよりにあらず・たよりならず」は見出し難いので、これを除く三者を対象に考察することにする。

前述の三語について考察するに当たり、問題となるところを簡単に整理すると次のような点に興味が惹かれる。本稿では主に後半に示した問題について考察を加える。◇和化漢文等における「無便」「不便」は、どのような語が漢字表記されたもので、どのように訓まれるべきか。◇「びんなし」「ふびんなり」の「びん」は「便」の字音読語と見られるが、当初から漢語を字音読したのか、或いは和語の漢字表記を経て字音読されたものか。◇漢語「便」と和語「たより」とは意味・用法上どのような関係にあるか。同義語か、二形対立の位相語かなど。◇漢字交り文等における「便無し」と表記は、「たよりなし」と「びんなし」とのどちらの語が意識されたものか、或いは、文脈や意味・用法などに応じて訓み分けることが可能か。◇「たよりなし」と「びんなし」とは、意味・用法上どのような関係にあるか。別語か、二形対立の位相語か。◇類義語とされる「びんなし」と「ふびんなり」との間にあるニュアンスや意味・用法上の共通点や相違点は何か。また、「たよりなし」との関係はどうか。◇「ふびんなり」に意味の歴史的変遷があるとすれば、「たよりなし」「びんなし」にも関連性のある変遷はあるか。或いは、その要因は何か。

基本的な興味は、語形上異なる語が、同一の意味と機能を持ったまま、同一資料中や同時代・同一種の文体の他資料に亘って、ニュアンスを変えたり文体的位相語として対立したりすることなく併存することが、一般的な事とは思えない

点にある。それらの語の間には、異語形を必要とするニュアンスや意味・機能の違いがあったと考える方が自然であろう。以上の問題を考える為に、まず中古・中世の和文資料と片仮名文資料を対象とし、和化漢文については今後改めて考えたい。尚、実際には片仮名文資料に、斯かる語の使用が殆ど認められなかった。

「たより」・「たよりなし」について

「たよりなし」「びんなし」は語源的には「たより」や「びん」に否定語「なし」が結びついた形である。両者が仮に同義語であるならば、「たより」と「びん」とが同義関係にあるはずである。そこで、まず「たより」と「びん」との関係から確認しなければならないが、「びんなし」以外の「びん」使用例は、次の一例を見出すのみである。⁽⁴⁾

○「あさましく心よりほかにおぼつかなくなりぬるを、をろかになおほしそ。御あやまちとなん思ふ。かく参り来ることびんあしと思入くあまたあるやうに聞けばいとおしくなん。…」
〔和泉式部日記〕

「びんあし」は「びんなし」と同義で、共にへ都合が悪い意の状況判断・評価表現の語といえる。この場合の「びん」はへ都合・利便の意の名詞で、和語「たより」と意味的に通づるようには解釈できない。「びん」と同義と認められ、同用法の名詞としては漢語「便宜(びんぎ)」がある。和文資料等には殆どないが、次のような例も拾える。

○「いかに、その部屋はあくやと、いみじくなん。なほびんぎあらば告げられよ。さりぬべくは、必ずく奉り給ひて、御かへりあらば、なぐさむべき。いとあはれなることを思ふに」
〔落窪物語・巻一〕

○かくてわたらせ給けるが、御むほんの御くはだての、ちは、便宜あしからんなどて…
〔保元物語・上〕

先の「びんあし」と右例の「便宜あし」との間に意味上の相違は見出し難い。このような「びんぎ」は、源氏物語等では皆無であり、漢字交り文でも必ずしも多くなく、今昔物語集で四例、十訓抄で一例、延慶本平家物語でも一三例が使用される程度である。また、その意味も極めて限定的で、いずれの場合もへ都合・利便・好機の意味で把握される。

そこで、比較対照のために、和語「たより」が実際の文脈の中でどのような意味で解釈できるかを整理したのが次の表である。「たより」の内容が、具体的に表現されたり想定できたりする場合は別として、抽象的なものであったり漠然とした事物や人であったりする場合は様々な解釈が可能である。従って、一つの用例が複数の意味項目に分類し得る場合もでてくる。尚、表中の記号は、意味解釈の妥当性が高く用例の多い順に、◎○△を以て示した。表に見るように、和語「たより」が漢語「びん」「便宜」と重なる意味として解釈できる例は極めて少ない。和語「たより」が名詞として多

伝達内容	運・幸運	都合・利便	機会・好機	手段・方法	資力・財力	頼みの物・人	縁・手掛かり	用例数	資料	
									意味	資料
△			○	○		◎	◎	2	土佐	日記
			○			◎	◎	12	平中	物語
						◎	◎	4	落窪	日記
			○			◎	◎	12	蜻蛉	日記
				○		◎	◎	4	三寶	詞子
						◎	◎	1	枕草	日記
			◎	△		◎	◎	1	和泉	日記
○		△	◎			◎	◎	51	源氏	物語
△	△		◎	△		◎	◎	9	栄花	物語
			◎	△	△	◎	◎	8	夜の	覚書
		△	◎	○		◎	◎	8	浜松	物語
	△	△	◎	○		◎	◎	4	更級	日記
△			◎	○	△	◎	◎	18	狭衣	物語
	◎		◎	○	◎	◎	◎	68	今昔	語集
			△	△	○	◎	◎	1	打聞	集集
	○		△	△	○	◎	◎	18	古本	話集
	○					◎	◎	1	保元	物語
	○				○	◎	◎	2	平治	物語
	○		○	△		◎	◎	10	宇治	遺物
	○		○	△		◎	◎	39	延慶	本家
	△		△	△		◎	◎	7	十訓	抄
△	△		◎			◎	◎	25	とは	ざたり

様な意味を担う情況から見ても、意味的に「たより」が「びん」「びんぎ」を内包するとは見なせても、一対一的な対応をする同義関係の単純な位相語とは見なせない。

以上のことから、「たよりなし」と「びんなし」とはその意味・機能を異にすると見る方が現実的である。即ち、「たよりなし」は、「たより」が「ない」という主述関係で二語それぞれの意味・機能が顕在化しており、単に或る状況を叙述する用法が基本であるのに対し、「びんなし」は、後述するように、一語相当の資格で機能する一定の価値判断に基づいた評価表現の語である。しかし、「たよりなし」にも一語相当の資格で情意表現に用いられたと解釈できる例が少数ながら存する。「たよりなし」七九例中の一〇例(13%)である。

○「……日ごろは山寺にまかり歩いてなん。いとたよりなくつれくりに思たまふらるれば、御かはりにも見たてまつらんとしてなん帥の宮に参りてさぶらふ」
〔和泉式部日記〕

○「無慙の者どもや。我は兄なれば前に立てゆかんと頼しくこそ思ひつらめ。少き心共にさこそたより便なく思ふらめ、臆而追付て、死出山・三途の河とかやをば引越んずるよ。」
〔保元物語・下(傍線部以外の振り仮名は割愛)〕

○「……けふは萬をすて、参り候つるなり。かくたよりなくおはしますとならば、あやしくとも、ゐて候所にもおはしまし通ひて四五日づゝもおはしませかし。……」
〔宇治拾遺物語・巻九〕

○「……世に捨てられ、たよりなしとて、また異君にも仕へ、もしはいかなる人の家にも立ち寄りて、世に住むわざをせば、亡き後なりとも不孝の身と思へし。……」
〔とはずがたり・巻一〕

○「我もとへ」とてありしかども中くむつかしくて、近きほどに宿を取りて侍しかば「たよりなくや」などさまく訪ひをこせたるに、
〔とはずがたり・巻四〕

右例は単なる「たより」が「ない」という状況の叙述ではなく、へ心細い・寂しい・辛いという心理的叙述(情意表現)と解釈できる。後述するが、「びんなし」「ふびんなり」との違いは、一定の価値判断に基づく評価表現でないことと、

情意主体（感情を抱いた主体）自身の内面的な情意表現で、他者の心情を推量する場合も情意主体の内面で主観的に判断した情意（心細い・寂しい・辛い）の表現である点にある。「たよりなし」という感情を抱いた主体者が、主体者側の状況を、主体者側にとつての情意的評価として表現するものである。

「びんなし」について

今回の調査範囲内で、「びんなし」は、評価表現に用いられ、一語相当の資格で機能したものが中心である。「びん」が単独で用いられた例は見出せないものの、先学によつて「びん」＋「なし」という主述関係にある二語の連語（へくがな）と解釈される例もある。多くの「たよりなし」が、状況叙述の表現に用いられ、「たより」＋「なし」であつたことを考え合わせると、同様の連語「びんなし」との間に意味やニュアンスの差があるのか否かが問題となる。

○「我いふこと同じ心に答へたる子こそなけれ」との給へば、少将例の腹立給ひぬと見て「何しにかは、いひあはせ給ふびんなければ、しか申侍給ふに、かくさいなむはいとこそ苦しけれ」とて、
〔落窪物語・巻四〕

○（宰相を）うち見つけ給に、おほつかなく、いぶせき事どもの騒がしく、まぎれて、えも問ひやらず、たゞおほかたに目をつけて、見おこせくし給を、中将は心えながら、びんなくてえきこえず。
〔夜の寝覚・巻二〕

古典大系では「いひあはせ給ふびんなければ」を「こ相談なさる相手がないので」とし、「びん」を「頼みになる人」と解釈する。しかし、「何しにかは、いひあはせ給ふ。びんなければ、…」と見れば、「びんなし」は一語相当の状況判断・評価の語と見得る。二例目も、大系では「折・機会がなくて」という状況叙述の表現と解するが、これもやはり周囲の目が気になつた為に「体裁・都合が悪くて」という状況判断・評価の表現と見た方が良い。いずれも「なし」が不存在の形容詞としての意味を実質的には失い、意味上も機能上も「びんなし」で一語相当に機能していると解釈できる。

○いと清げにて御粥まゐりたり、御手水とり具してまゐりたり「あやしう、びなしと聞きしほどよりは」とおぼす。

女君はいとあやしういかでと思ひ給へり。

〔落窪物語・卷一〕

○かの白き米多くにかへて御臺まゐりに来ぬ。物のくさはひはならびたれば、少将の君、びなしとのみ聞きしに、いと心にくゝおぼす。女君もいかなるらんとおぼす。

〔落窪物語・卷一〕

右例は〈資力がない・不如意である〉の意に解釈できる。前表にも見たように、「たより」に〈資力・財力〉の意味があり、説話資料の「たよりのなし」は〈資力がない〉の意に解せるものが多いが、「びんなし」には右例以外に見出せない。ただ、斯かる意味の「たよりのなし」が多く連体修飾（たよりのなき女）や連用修飾（たよりになくなりぬ）の語として状況叙述の表現に用いられたのに対し、右例「びんなし」は述語であり、表現主体が判断・評価する表現である点で異なる。即ち、「たよりのなし」が基本的に単なる状況の叙述表現に用いる語であるのに対して、「びんなし」の最も大きく異なる特徴は、「一定の基準を持った価値判断によって行う評価表現」に用いられる語である点にある。

次に、斯かる「基準」がどのようなものが問題になる。そのことを考える為に、或る対象を評価するのに、「びんなし」だけでなく、他の評価語を並列して用いながら表現した次のような例が参考になる。同一人物が、同じ対象を、同一文中で評価した表現であれば、その基準や評価内容は同一か極めて類似した性格のものと考えて良からう。

○「…上のいみじく世をみだれ思したる気色なるを、かくのみ思ひうかれ給へる御気色を見給ふが、いかにいと安げなく思らんかし。たが御ためにも、いみじくびんなくも見ぐるしくあることのさまかな…」

〔夜の寝覚・卷一〕

○おしたちいらむことは、さばかりの人のひとつにはまことに臥いたべかめるに、さまあしくびんななかるべければ、宮の思しめし、人の言ひおどろき申さむ事もくるし。

〔夜の寝覚・卷四〕

○「…さきの世のちぎり、のがれがたく思ひ知らるゝ事なれども、さりとして我がため人のため今更いとあひなくびなかるべきわざなるを、みこいとあはれにおぼしみだれ、おしみきこえ給さま…」

〔浜松中納言物語・卷一〕

○耳にも聞入れぬに、すこしことよりはりなれど「いみじくあるまじくびんなきことと言へども、いとかくしもあるべき

事か」と心憂けれど、われも人にひと目もつゝまず。

〔夜の寝覚・卷一〕

○姫君も「わが身はかくて過ぐる、いとびんなくあるまじきことなりかし。人もかならずさぞぎく思らん」とのみおぼせば

〔浜松中納言物語・卷三〕

○川原ニテ「去来我等熱キニ水浴ム」ト一人ノ檢非違使ノ云ケレバ……檢非違使此レヲ見テ「此レ更ニ不有マジキ事也。糸便无シ。」
輕々ニ何ナル檢非違使カ川原ニテ水ハ浴ム。馬飼フ童部ナド様ニ穴異様」ト云テ

〔今昔物語集・卷二九〕

いづれの場合も、併用される他の語「みぐるし」「さまあし」「あいなし」「あるまじ」等が、直接心理的な感情とは結びつかない客観的な評価語である。特に同じ対象を「あるまじ」でも評しながら併用された用例は多く、典型的にその特徴を示す。即ち、これらに共通する価値判断の基準は、極めて理性的で客観的・一般的な道理（常識・条理・適正）の如きものである。このような併用された語との関係から考えれば、「びんなし」も「理性的・論理的基準に基づいて行われる客観的評価表現」に用いられることをその特徴として捉え得る。

しかし、「びんなし」が決して情意的な評価表現に用いられない訳ではない。基本的には理性的・論理的な評価表現に用いられるのであるが、主観的評価表現になって、それが感情を表現したものと解釈できるものもある。

○いと嬉しげに思したるを見給ふに「宮の御為にもいと〜おしう、自らのためににはまことしうもとりなされば、いと煩はしうびんなかべきこと」

〔狭衣物語・卷三〕

或る状況（噂が事実のようにとられること）をめぐって、他者に対する情意的評価表現には「いとほし」へ「気の毒だ」を用い、自分に関わる評価には「びんなし」を用いる。これを「いとほし」と同じような情意表現と見てよければ、へ不愉快だ・迷惑だの意になり、「びんなし」における情意を含む評価の特徴を典型的に示す例と捉えられる。例えば、へ「気の毒だ・かわいそうだ」という情意的評価表現は、或る状況を相手側にとつて好ましくないことと評価して、評価者が相手側に気持ちを向けて自らも心理的に同化した表現と捉えられる。それに対して、「びんなし」のへ不愉快だ・迷惑だ

の場合は、前例の如き表現主体と評価者が同一人物である場合は勿論、両者が一致しない次例の如き場合も、評価者が評価者側のこととして情意的評価をした表現と見得る。いわば当事者的な情意表現が「びんなし」における情意的評価表現の特徴である。斯かる点で「たよりなし」や「ふびんなり」のそれとは性格を異にする。

○美濃狐亦重テ問フニ不答ヘ。遂ニ四度問フニ尾張ノ女答ヘテ云「我レ来レル方ヲ不知」ト其時美濃狐此ノ言ヲ便無シト思テ尾張ノ女ヲ罵ムトシテ立寄ルニ

〔今昔物語集・卷二三〕〔cf. 日本靈異記で「無礼」

従つて、「びんなし」を「ふびんなり」と同じように「気の毒だ・かわいそうだ」と解釈する向きもあるが、基本的な両者の相違点が指摘できる以上、可能ならばその差異を配慮した解釈がなされるべきであろう。例えば、次のような例については「気の毒だ・かわいそうだ」と解釈できなくもないが、先学の指摘にもあるように、やはり「ふびんなり」などと同じような感情の表出と見ることは無理であろう。新大系注（弘貞）に「旧大系、「かわいそうだ」と解し、諸注もこれに従うものが多いが、存疑」とする。この場合は本来的な「びんなし」の用法として、「不条理・不適切」であることを諷めた理性的状況評価の語と見るべきで、情意表現へ「かわいそうだ」とは見難い。

○「今より後、老法師とてあなづりそ。いとびんなきことなり」といひて、

〔宇治拾遺物語・卷一四〕

○みかどきこしめしあまりて「このをのこどもこれをかく笑ふ、びんなきことなり。父の御子聞て制せずとて我をうらみざらんや」など仰られて、

〔宇治拾遺物語・卷一一〕

漢字表記の「便」「無便」「便無し」について

「たより」と「たよりなし」「びんなし」は、漢字交り文では仮名表記されたものが殆どなく、それぞれ「便」と「無便」「便無し」の漢字表記がそれに相当する。「無便」「便無し」は、訓読するか音読するかによって、「たよりなし」とも「びんなし」とも解釈できる。また、既に述べたように和文資料における両者の意味・用法は異なる。そこで、「無便」

「便無し」は「たよりなし」と「びんなし」とのどちらの語が意識されたものか、或いは両者を同じ表記にしたものだとすれば、読み分けを可能にする基準等があるか、それはどのようなものかなどが問題となる。

まず、漢字表記「便」と「たより」「びん」との関係から検討すると、『延慶本平家物語』の「便」に、〈利便・都合の良さ〉を意味する漢語「便宜」に相当し、「びん」と訓むべきかと思われる例がある。これまでに見てきたように、名詞用法の「たより」と「びん」とを明確に訓じ分け得るような基準は求め難いが、仮名文学作品の「たより」には〈利便・都合の良さ〉を意味すると解釈すべき積極的な判断材料が得られず、少なくとも「たより」単独で、〈利便・都合の良さ〉を意味する確かな例は確認できないので、次のような例は漢語「びん」とすべきかと思われる。

○七道諸 国之調貢、万物運上之便_宜、西ニ河アテ東ニ津アリ。便_{無煩}。若シ移ラバ余所ニ定テ有後悔_歟。

〔延慶本平家物語・卷二末〕

また、次のような例は和文の単独用例「たより」にない〈道理・理由〉を意味する「便」で、これも「びん」と訓むべきかと思われる。和文における用法との共通性を求めるならば、「びんなし」が理性的・論理的価値判断による評価表現に用いられる語であることから、分析的に「びん」にその理性的・論理的な基準の一つとしての〈道理・理由〉の意味があると見ることも可能である。前例と合わせ考えると、和文資料に単独の「びん」はないものの、和漢混淆文には名詞の漢語「びん」が存した可能性として捉えることができる。

○「…左青龍右白虎前朱雀後玄武、四神相應ノ地也。尤帝都ヲ定給ハンニ旁便_{アリ}」ト 〔延慶本平家物語・卷二中〕

『十訓抄』では「タヨリ」「便リ」「便ナシ」「不便」があるが、表記の面から「びんなし」の確例は認められない。少なくとも仮名書きの「ビンナシ」はない。しかし、次の例は他資料との比較からも意味用法上も「びんなし」と解釈できる。単なる状況説明でも、当事者的な情意表現〈心細い・寂しい・辛い〉でもなく、一定の基準に基づく価値判断がなされた評価表現と見得るからである。更に、「タヨリ(モ)ナシ」二例と「便ナシ」三例とを比較しても、仮名書き

例は、「ホノメカスタヨリモナクテ」の如く他の名詞用法「たより」と同様に連体修飾語を承けて「なし」に対して主語資格に立つのの対し、次の「便ナシ」は一語相当に機能した判断・評価表現の語となっている。

○聊口入ヲ申タリケルヲ、俊頼腹タシキ氣ニテ「ヲノレカヤウナル侍ナトハ、タコソ居タレ。公達ノ物仰ラル、
二、サシラヘスルヤウヤハアル。アラ便ナ」ト云ケレハ、明兼ニカリケリ。
〔十訓抄・卷二〕

○「…出家ウチシテ片方ニ居給タレカシ」トウチツフヤキナカラ「細ニ承リヌ。次テ侍ニ奏シ侍ルヘシ。此ホトイタル事有テナン。カクテ聞侍ル。イト便ナク侍ト聞エヨ」トアルヲ、
〔同・卷七〕

『延慶本平家物語』にも同様に「びんなし」の確例は認められない。仮名表記の「ピンナシ」はなく、「びんなし」である可能性を持つ表記には「便ナシ」四例と「無便」三例がある。しかし、その意味用法からは、いずれも和文語の「たよりなし」が漢字表記されたものと捉えられる。まず、「無便」表記の語は次のような例である。

○「……左中将清経モ海中ニ沈ミ、備中守師盛モ一谷ニテ被打ヌ。惟盛サエ又カク成ヌ。如何計無便」思スラム。遂ニ可遁ナラネバ思立ヌト申セ」トテ御涙又セキアエズ。
〔延慶本平家物語・卷五末〕

○「……備中守モ打レ給ヌ。惟盛モカク成レバイト如何無便」思給ハムズラント心苦コソ」
〔同・卷五末〕

○「……王照君ガ王宮ヲ出テ、胡国ニ趣テ十九年マデ歎ケムモ、我身ニテコソ思知ラレ侍レ。捨ガタカリシ都ヘ再立帰タレドモ昔ノ様ニ不覚。七世之里ニ帰リケム人モカクヤ無便」待ケム。……」
〔同・卷六末〕

いずれも評価者（表現主体とは一致しない）が自身にとって「無便」と評価する表現である。心理的判断・評価の情意表現とも見得るが、「びんなし」や「ふびんなり」のような或る一定の基準に基づいての判断・評価ではない。評価者が自らのへ頼みとなるものがない状態を叙述したもので、それを自分にとっての心理状況として表現した当事者の情意表現として見ると、へ心細い・寂しい・辛い等の意にも解釈できるのであつて、意味的にもその表現の特徴からも「たよりなし」に通ずる。

○此人々露命消ヤラヌヲ惜ベシトニハナケレドモ、朝ナタナヲ訪ベキ人、人モ從付又身共ナレバ、……水ヲ結バムトテ沢辺ニ疲ルヽヲリモアリ。サコソ便クナク悲シカリケメ。押ハカラレテ無慚也。〔延慶本平家物語・卷一末〕

「便ナシ」表記四例中の三例が客観的状況叙述の表現であるのに対し、右一例は「悲シ」と併用されることなどから、心理的情意表現へ心細い・寂しい・辛いの意と見得る。表現主体が第三者的にへ気の毒だ・かわいそうだと評する後続の「押ハカラレテ無慚也」とは、対照的にその表現の特徴を異にする。「びんなし」と解釈する可能性も否定できないが、表現上の特徴からはやはり「びんなし」ではなく、「たよりなし」の情意表現と見る方がふさわしい。

更に、『今昔物語集』には五三例の「便无シ」がある。その内「便ヨリ无シ」表記六例を含む二九例が和語「たよりなし」と解釈される。その多くは「連体修飾語(句)+便无ニ」(二三例)であり、且つ「連体修飾語(句)+便」と「无」が主述関係になっている。連体修飾語(句)を承けない例でも「父母ナントモ无カリケレハ物云懸ル人ナトモ无クテ便ヨリ无カリケルマニ」(卷一七)、「如此ク便ク无クシテ年来有ルニ」(卷一六)、「一供奉寄リ付ク方无テ極テ便ク无ク成ヌ」(卷二〇)、「其カ初ハ貧クシテ便ク无ケル時ニ」(卷二六)、「人ノ娘ノ父モ母モ無クテ便ク迷ヌヘキヲ」(卷三一)の如くに、意味的にも主述関係にある「たよりなし」の漢字表記と見るべきものである。これらはいずれも客観的な状況の叙述であつて、価値判断を伴う評価表現や心理的な情意表現とみるべきものではなく、ここまでに検討してきた「たよりなし」に通ずることが確認される。一方、同じ「便无」表記でありながら、連体修飾語(句)を承けないものも多く(二四例)は、「便无シ」が一語相当の資格で機能して述語や述部を構成し、一定の基準に基づく価値判断を伴う評価表現に用いられる。前述の例とは意味上も機能上も明らかに異なり、「便」と「无」とが主述関係にはなく、分析的にも「便」に独立した名詞的機能は認められない。「たよりなし」ではなく、評価表現の語「びんなし」と訓むべきもののように思われる。

○「天皇ノ后僧玄墓ヲ寵愛シ給フ事専ニ世ノ謗ト有リ。速ニ此レヲ可被止シ」ト。天皇此ク申シタルヲ糸便ク无キ事也ト思シ食テ

○「此ル醉ノ次ニ申ス便无^キ事ナレトモ家礼ノ為ニ此ク参タルニ實ニ喜ト思食サバ心殊ナラム曳出物ヲ給ヘ」ト
〔卷二二〕

○可然キ所ニ宮仕シケル女房ヲ語ヒテ忍テ通ケリ。其ノ局ニ入り臥サムカ便无^キカリケレハ其ノ傍ニ有ケル下衆ヲ語ヒテ
〔卷二六〕

○「殿上ノ男共モ此ヲ咲フ糸便无^キ事也。父ノ御子此レヲ聞カバ此ヲ制止スルヲバ不知ズシテ我ヲコソ我恨ムトスレ」
〔卷二八〕

○「此レ更ニ不有マシキ事ナリ。糸便无^シ。軽々ニ何ナル檢非違使カ川原ニテ水ハ浴ム…」
〔卷二九〕

以上のように、「たよりなし」も「びんなし」も、漢字交り文等での漢字表記は同じ「無便」「便无」と見ることができ、和文資料における「たより」は、情意表現に用いられ、述語や述部に用いられる「たよりなし」の一部を除けば、名詞として機能していることが、形の上からも機能・用法の上からも明らかである。漢字交り文の場合もその殆どが「たより」と「なし」との連語と見るべきものである。一方、「びんなし」は一語相当の資格で述語や述部に用いられ、一定の価値判断に基づく評価表現に与るといふ特徴が明確である。従つて、斯かる基準によつて観察するならば、漢字表記の「無便」「便无」も、文脈による解釈と意味や機能・用法の違いを明らかにすることで、名詞相当の「たより」と「なし」との連語か一語相当に機能する「びんなし」かを区別し、訓み分けることは可能である。漢字交り文等において語形の異なる別語が同一漢字で表記されても誤読・誤解が生じないほどに、「たよりなし」と「びんなし」との間に存する意味・用法上の基本的な違いは、自明のこととして認識されていたと考えられる。

「びんなし」と「ふびんなり」とについて

「たよりなし」に対する「びんなし」の特徴が、論理的・理性的基準による判断・評価表現に用いられる語であること述べてきた。両者は基本的な部分で異なる表現性を持つが、「びんなし」と「ふびんなり」とではどうであろうか。結論的には、「ふびんなり」も或る一定の基準による評価表現である点で「びんなし」と類似しているように見受けられるが、この両者間にも表現上のニュアンスに明確な相違点を認めることができる。

表 B

用例数合計	表現主体以外				表現主体自身				評価者		ふびんなり
	行為		状況		行為		状況		評価者の対象	評価の向き	
	他者	評価者	他者	評価者	他者	評価者	他者	評価者			
3									3	評価者	落窪物語
2									2	他者	枕草子
9									2	評価者	源氏物語
8									5	他者	源氏物語
4									1	評価者	栄花物語
4									6	他者	栄花物語
1									1	評価者	夜の寝覚
1									3	他者	夜の寝覚
1									1	評価者	浜松中納言物語
2									1	他者	狭衣物語
15									2	評価者	今昔物語集
2									1	他者	今昔物語集
3									2	評価者	古本説話集
6									3	他者	古本説話集
10									3	評価者	保元物語
10									7	他者	保元物語
28									4	評価者	平家物語
8									16	他者	平家物語
5									6	評価者	十訓抄
5									2	他者	十訓抄
106									2	評価者	とはずがたり
106									4	他者	とはずがたり
106									64	評価者	総計
106									9	他者	総計

h	g	f	e	d	c	b	a	評価者	記号化
p	o	n	m	l	k	j	i	他者	

表 A

用例数合計	表現主体以外				表現主体自身				評価者		びんなし
	行為		状況		行為		状況		評価者の対象	評価の向き	
	他者	評価者	他者	評価者	他者	評価者	他者	評価者			
23									1	評価者	落窪物語
17									5	他者	落窪物語
5									1	評価者	蜻蛉日記
5									1	他者	蜻蛉日記
5									1	評価者	枕草子
5									1	他者	枕草子
53									1	評価者	和泉式部日記
53									2	他者	和泉式部日記
15									3	評価者	源氏物語
15									1	他者	源氏物語
19									1	評価者	源氏物語
19									1	他者	源氏物語
20									1	評価者	栄花物語
20									1	他者	栄花物語
1									1	評価者	夜の寝覚
1									3	他者	夜の寝覚
25									1	評価者	浜松中納言物語
25									1	他者	浜松中納言物語
24									1	評価者	更級日記
24									1	他者	更級日記
1									1	評価者	狭衣物語
1									3	他者	狭衣物語
8									2	評価者	今昔物語集
8									2	他者	今昔物語集
4									3	評価者	古本説話集
4									4	他者	古本説話集
3									2	評価者	保元物語
3									1	他者	保元物語
2									1	評価者	宇治拾遺物語
2									1	他者	宇治拾遺物語
226									4	評価者	平家物語
226									3	他者	平家物語
226									2	評価者	十訓抄
226									1	他者	十訓抄
226									1	評価者	とはずがたり
226									1	他者	とはずがたり
226									9	評価者	総計
226									0	他者	総計
226									18	評価者	総計
226									8	他者	総計
226									8	評価者	総計
226									3	他者	総計
226									23	評価者	総計
226									19	他者	総計

通行の古語辞典等では、「びんなし」「ふびんなり」に共通する意味として「不都合だ」との説明がなされることが多いので、便宜的にその言い方に従うと、両者の特徴は「不都合だ」という判断・評価表現に与る点にある。このような評価表現で重要なことは《誰が、誰の状況や行爲を、誰にとって》不都合だと判断・評価するかである。即ち、《評価者は誰か、評価対象は何か、評価の向きは誰か》が問題になる。そこで、このような基準で用例を分類したのが表A・Bである。評価者が表現主体自身である場合（会話文なら会話主）とそうでない場合（地の文における説明的表現など）があるのでまずそれを区別する。次に、評価対象が或る人物の状況・状況か行爲かを区別し、更にその対象が評価者自身に関わるものかそれ以外の他者に関わるものかを区別する。また、それが誰にとって不都合と評価されるか、つまり、評価の向きが評価者自身かそれ以外の他者かを区別する。尚、用例の確認できない資料は表から外した。「びんなし」二二六例と「ふびんなり」一〇六例のほぼ総てが表中のいずれかの項目に分類できる。⁶⁾

表A・Bの用例を、評価者が《誰の状況や行爲を、誰にとって》不都合だと評価したかに着目して整理し直すと次の数字が得られる。表A・Bの分類項目をその内容から、大きく次に示すI～IVの四種類に、更に下位分類として表に示したa～pの一六種類に分類・整理して記号化した。各項目の数字は両者の表現上の特徴を如実に反映する結果として捉えることができる。以下、上段に「びんなし」の用例数を、下段に「ふびんなり」の用例数を示す。

I 評価者自身の状況や行爲を、評価者自身にとって	【a/c/e/g】	19/3	8/0	計30	0/0	0/0	計0
II 評価者以外の者の状況や行爲を、評価者自身にとって	【b/d/f/h】	23/8	18/9	計58	4/2	0/0	計6
III 評価者自身の状況や行爲を、評価者以外の者にとって	【i/k/m/o】	21/33	4/0	計58	9/2	0/0	計11
IV 評価者以外の者の状況や行爲を、評価者以外の者にとって	【j/l/n/p】	42/30	2/6	計80	64/6	18/1	計89

右の整理と表A・Bから看取される両者の特徴的な項目について簡単に整理する。まず、「びんなし」について見る。

①殆ど総ての項目に用例が分散し、様々な判断・評価表現に用いられることが判る。②評価の対象が、状況・状態に関

するもの六割、行為に関するもの四割で、大差がない。③評価の向きが、評価者自身にとつての評価であるもの(I-II)約四割、他者に対する評価(III-IV)が約六割で、これにも大差がない。④表Aに見るように、各資料間の用例数の違いは、時間の推移による特徴的な変化とは認められない。⑤平安後期以前の資料では、「ふびんなり」の用例に比して圧倒的な使用数の多さが認められる。⑥I~IVについて見ると、用例が全体に比較的バランス良く分布し、II~IVにはそれぞれ25~35%の例が確認できるにも拘わらず、Iの用例だけが全体の一割強に過ぎない落ち込みを示す。この項目は「たよりなし」が主に担っていたことと関係するものと考えられる。

次に、「ふびんなり」について、「びんなし」と比較する為に、同じ視点による考察を同じ整理番号で示す。①項目によつて極めて特徴的な偏在がある。j項目に全体の六割が集中し、n項目を合わせると全体の八割近くに及ぶ。つまり、評価者以外の人物の状態・状況を対象に、評価者以外の人物にとつて〈不都合だ〉と評価する表現であることを大きな特徴とする。評価者が他者の立場に同化する評価表現と言える。②評価対象が行為に関するものは全体の僅か一割に過ぎない。③評価者自身にとつての評価となるもの(I-II)は全体の5%程度に過ぎない。④表Bに見るように、「ふびん」にへきの毒・かわいそうの意味が生じたとされる頃⁷⁾から、次第に表現主体以外の人物が評価者となる例が認められるようになる。⑤平安後期頃の資料から「びんなし」との用例数が拮抗し始め、中世になると使用状況が逆転する。当初の「びんなし」は評価表現として種々の表現性を担っていたが、次第にその意味・機能を狭めて限定化され、「ふびんなり」の勢力が増すことによつて、両者間に機能分担が行われたことを表すと見得る。⑥IVの項目に全体の85%が集中するという極めて特徴的な偏りがある。「びんなし」でもIVに最も多くの例があるが、「ふびんなり」の偏りは圧倒的である。古本説話集以降の資料では、「ふびんなり」の使用例はほぼIVのみと言つて良く、一方「びんなし」にはIVの使用例が殆どなくなる。極めて顕著な傾向である。

以上によつて、両者の特徴は概略把握し得る。「びんなし」は、評価者が論理的・理性的な基準によつて価値判断した

評価表現であるため、様々な内容を表現し得るのであり、評価者が表現主体以外の場合でも、その人物の価値判断をその人物に成り代わって、客観的に表現し得るのである。一方、「ふびんなり」は、基本的に表現主体自身が評価主体である場合にしか用いられない。他者に成り代わって、他者の心理や価値基準を推し量っては判断できない主観的内容について表現する語だからである。即ち、「ふびんなり」は、表現主体が、自身の主観的な基準によって、直観的に或いは情意的に或る状況を表現する語であると言つて良い。

ところで、「びんなし」「ふびんなり」は、基本的には判断・評価表現であるが、文脈や内容によつて情意的な表現と見得る場合もある。勿論、評価表現か情意表現かは解釈の問題であつて、どちらかにしか解釈できないという性質のものではないが、情意表現という点に注目した場合の「たよりなし」「びんなし」「ふびんなり」三者の関係について、これまでの考察結果と関連させて考えると、それぞれが有する特徴から次のように整理することが可能である。まず、「たよりなし」は、評価者が自分のことを自分にとつて不都合だと内省するもので、へ心細い・寂しい・辛い」という極めて個人的な内面に関わる内向性の心理表現に用いられる。次に、「びんなし」は、評価者が他者のことを自分にとつて不都合だと判断するもので、へ不愉快だ・迷惑だ」という他者によつてもたらされる評価者自身の情意を表現する当事者的情意表現に用いられる。それに対して、「ふびんなり」は、評価者が他者のことを他者にとつて不都合だと捉え、へ気の毒だ・かわいそうだ」という評価者の情意を他者に向けながら思いを致して同化する同情の表現に用いられる。これらの特徴的な相違点は、先のⅠ～Ⅳの分類にそのまま対応させて整理できる。

- | | | |
|---------------------------------|----------------|---------|
| Ⅰ 評価者自身の状況や行為が、評価者自身にとつて不都合 | ↓ へ心細い・寂しい・辛い | 「たよりなし」 |
| Ⅱ 評価者以外の者の状況や行為が、評価者自身にとつて不都合 | ↓ へ不愉快だ・迷惑だ | 「びんなし」 |
| Ⅲ 評価者自身の状況や行為が、評価者以外の者にとつて不都合 | ↓ へ申し訳ない | 「びんなし」? |
| Ⅳ 評価者以外の者の状況や行為が、評価者以外の者にとつて不都合 | ↓ へ気の毒だ・かわいそうだ | 「ふびんなり」 |

Ⅲは第三者的な評価であるために情意的表現の性格が弱く、(申し訳ない)と言う程度の意に解釈できるものがあり、用例も多くはないが、「びんなし」にその例が認められる。「びんなし」は、評価表現において種々の表現性を担っていたように、情意表現においても、「たよりなし」「ふびんなり」が限定的であったのに比して、かなり広い範囲の表現に用いられ得たのであろう。三者は、それぞれの特徴的な表現性を持ちながら、共存し得たのであろう。

むすびにかえて

「たよりなし」「びんなし」「ふびんなり」には三者が同時に共存し得るだけの必然性(ニュアンスや意味・用法の違い)があったのであり、その為に相互補完的な関係で位相を違えることなく用いられたのである。また、「ふびんなり」が鎌倉時代以降に情意表現(気の毒だ・かわいそうだ)という意味を持つようになったのも、既に当初の評価表現における原義的な判断・評価の有り様の段階からその要素を持つていたからであり、これも必然的な転義の方向であった。斯かる「ふびん」は更に意味・用法を転じて行くが、それは原義の評価表現と転義の情意表現との意味的な隔たりが他の二者よりも大きかったために、変化に勢いがつき易かったのではないかと思われる。更に、他の二者が形容詞であるのに対して、「ふびん」は形容動詞であることが用法を様々に転じ易くした要因であったように思われる。形容詞と異なり、形容動詞は分析的に語幹を抽出し易いために、名詞や動詞にもその用法の幅を広げ易いからである。最後に、このことについて検討することで、むすびにかえたい。

○「…子を思ならひ、何をわけてをろかなるべきにはなけれ共、六条堀川の當腹の四人のをさなき者共、殊更不敏におぼゆる覚るなり。相構而此等をば義朝に申助て、善は子とおもへ悪くは切ても捨よ。…」
〔保元物語・中〕

○「信頼を討べき者あるよし告知する者候間、東国の方へ落行ばやと存候。幼少より御不敏を蒙り候つるに、都の中を出候はむ事、行空も覚候まじ」と申されければ、
〔平治物語・上〕

○「上皇をたのみまいらせて参りし」と申、さまざまに申入れられれば、もとより御ごふびんびんにおぼしめされしかば、傍にかくしをかせ給ひけり。(右三例、いずれも該当部分以外の振り仮名は割愛した。)

(保元物語・中)

右例は、評価表現の評価者が心理的に同化した同情〈気の毒に〉から更に進んで、愛情へかわいらしく・いとおしくの意になつてゐるようによ捉えられる。「ふびん」の漢字表記には「不便」が用いられ、保元・平治物語でも他は「不便」であるが、例外的に二例の「不敏」が存するのは、〈気の毒だ〉という意味との差異を反映した用字と推測される。仮名表記「御ふびん」も同様に、他の「不便」とは意味が異なり、「不敏」と通づる。いずれの場合も〈気の毒だ・かわいそうだ〉の意味として安定していた「不便」の表記を避けて、新しい転義の愛情表現へかわいらしい・いとおしいと區別するための表記が意識されたものと見られる。この新しい意味の愛情表現は亦、評価表現の「ふびん」が一旦〈気の毒だ・かわいそうだ〉の意味を表すようになると、他にも憐憫の情から愛情へと意味を転じた語があるように、その勢いで必然的に発生すべき要素と性格を持つていたのであろう。

○曰ごとに、御堂にまいらせ給けるに、しろきいぬをなん飼せ給ければ、いつも御身をはなれず御ともしけり。……犬はいよく不便にせさせ給けるとなん。

(宇治拾遺物語・卷一四)

○抑此登蓮ヲ不便ニシテ、入道ノ御内ニラカレケル由来ヲ尋レバ、連歌故トゾ聞エシ。

(延慶本平家物語・卷二中)

○大臣殿武士共ヲ呼給テ「此少者ハ母モナキ者ゾ、殿原構テ不便ニシ給ヘ」ト宣モアヘズ御涙スミケリ。

(延慶本平家物語・卷六本)

○「……二葉にて母には離れ候ぬ。父大納言ふびむに候しを、まだ襦袢の中と申ほどより、御所に召し置かれて候へば、私に育ち候はんよりも、ゆへあるやうにもさぶらふかと思ひて候へば、……」

(とはすがたり・卷二)

右例はいずれも、〈かわいがる〉の意と解釈でき、本来「ふびんに」「す」の二語であるが、意味的には既に一語相当の動詞として機能していると見るべきであろう。松尾聰氏が述べられたように、「かわいがる」は強者に対しては用い

られない言葉であることでもわかるように、自分より弱い立場にある者に憐愍の気持ち（気の毒な気持ち）をもつて庇護する動作が「かわいがる」なのである。⁽¹⁾「ふびんに」が「かわいらしく」の意になり、さらに名詞用法としての「ふびん」が「愛情」の意として用いられ、動詞用法として「かわいがる」の意で「ふびんにす」が用いられるようになったものと見ることが出来る。延慶本平家物語における総数四例の「不便ニス」が総て斯かる意味の例と認められる。右の例に限らず、『とはずがたり』では「ふびん」の例の殆どが、「気の毒だ」へかわいらしいのどちらにも解釈でき、いずれかには決め難いほど、この語の転義は進んでいるように見える。

注

(1) 通行の古語辞典等では多くがそのように記述される。辞書以外でも、例えば「源氏物語重要語句の詳解」(国文学解釈と鑑賞) 59年10月・青島徹)において、「類義語に「ふびん」があり、「びんなし」とほぼ同じ意味を表すと考えられる。」と説明される。

(2) 松尾聰「中古語「ふびんなり」の語意(一)」「(二)」(『国語展望』87～98・90年～96年)、田島優「不便考―同表記衝突―」(『愛知県立大学文学部論集(国文学科編)』37号・98年2月)

(3) 橋本博幸「平安和文学作品におけるフビン(不便)とビンナシ(便無し)の意味」(『文芸研究』123・90年1月)

(4) 調査と本文の引用に用いた資料は以下の通りである。『かげろふ日記総索引』(風間書房)『諸本対照三宝絵集成』(笠間書院)『打聞集の研究と総索引』(清文堂出版)『栄花物語全注釈』(角川書店)『古本説話集総索引』(風間書房)『延慶本平家物語』(勉誠社)『とはずがたり総索引』(笠間書院・新日本古典大系も参照)『十訓抄 本文と索引』(笠間書院)。以下、日本古典文学大系―土佐日記』『平中物語』『落窪物語』『枕草子』『和泉式部日記』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『狭衣物語』『今昔物語集』『保元物語・平治物語』『宇治拾遺物語』・『源氏物語』『更級日記』(以上二点日本古典文学全集も参照)。その他『法華百座聞書抄』『三教指帰注』『宝物集』『草案集』に用例無し。

(5) その他に、栄花物語に梅沢本の「たより」を富岡家旧蔵本で「びん」とした例がある。「たより」と「びん」とが通ずる例の如くであるが、異本系統に分類される富岡家旧蔵本は室町時代前後の書写本で、直截に両者の意味関係を反映するものとは見がない。「たより」の漢字表記「便」を、意味の異同が考慮されず、音読されたに過ぎないものと思われる。

○殿上人の座には懸盤のものどもいみじうし据へたり。御隨身所・召次所など机の物ども数知らずもて続き据へたり。たよ
り(びん富岡家旧蔵本)あるさまにしなしてもなしたるさままましうさすがに見ゆ。
〔栄花物語・巻一三〕

(6) 分類が容易でなく、便宜的に処理したものはへかわいがるゝ意味に用いられた愛情表現で後述する「ふびんにす」の数例である。

(7) 注(2) 参照。

(8) 具体的な用例を割愛したが、松尾聰氏の「中古語「ふびんなり」の語意(一)〜(二二)」(『国語展望』87〜98・90年〜96年)における詳細な用例の御考察や御解釈の結果は、情意表現の場合もそうでない場合でも、論者の指摘した両者の特徴や分析結果と齟齬するものではなく、両者間にあるニュアンスや意味用法上の相違点として示した本考察結果の有効性を裏付け得るものと考ええる。

(9) 例えば『今昔物語集』における「不便」と「便无」とを見ると、「不便」が巻五に一例確認できるのみで、他の「不便」四例と「びんなし」と見られる「便无」二四例は巻一一以降に集中して出現する。これだけの例から短絡に憶測できることではないが、天竺・悉曇部に出現しないことや多くの仮名文学作品にも頻用され、表現のニュアンスや意味用法上の相違を持ちながら共存していることをなど考え合わせると、「びんなし」も「ふびんなり」も字音読による語でありながら、和語に対する漢語や漢文訓読語という文体的位相語という性質のものではないことが解る。

(10) 例えば、「かはゆし」「いとほし」等の〈愛情・恋慕〉の意味は、原義〈困惑・憐憫〉の情から転じたものと言われる。

(11) 松尾聰「中古語「ふびんなり」の語意(八)」(『国語展望』94・94年)